

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子
『気鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画』

20世紀 歌人群像

間もなく21世紀。近代短歌から現代短歌へ……
短歌はこの100年でどのような足跡を残してきたのだろうか
この時代を生きた歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する

13 宮柁二 小池光

第一章 人と時代

宮柁二（本名肇）は大正元年八月二十三日、新潟県北魚沼郡堀之内村（現・堀之内町）に父保治、母ツネの長男として生まれた。家業は「丸末」という書店を営んでいた。少年時代は画家を志望し、県立長岡中学校に入学、佐渡への修学旅行ではじめて短歌を作り、相馬御風主宰する「木蔭歌集」に投稿したりした。中学を卒業後進学せず家業を継いだが、二十歳で単独上京し、新聞販売店、出版社事務員、額縁屋の住み込みなど職を転々とする。昭和八年四月世田谷砧村に北原白秋を訪ね門人となり、歌人としての第一歩をあゆみはじめた。

やがて「多磨」が創刊されてこれに加わり、昭和十年から十



歌人 群像

四年まで助手、秘書となつて白秋宅に通う。眼疾の白秋のため口述筆記するなどして晩年の白秋を誠心誠意助けた。前後して郷里の家が没落し一家は横浜に出てくる。昭和十四年川崎の日本製鉄（当時）富士製鋼所に入社するも八月には、召集され高田第三〇連隊に未教育補充兵として入隊、十一月、大陸に出発し、昭和十八年十月までほぼ四年にわたつて中国・山西省各地を転戦した。職務に忠実であつた兵士として兵長、伍長に進級している。この間「多磨」の有力新人として第一回多磨賞、また第一回多磨力作賞を受ける。十七年十一月六日、白秋の死を戦地で聞いた。十九年三十二歳で滝口英子と結婚、新婚生活もつかのま二十年六月再召集され、茨城の部隊で終戦をむかえた。

戦後は昭和二十一年十一月、処女歌集『群鷄』を刊行、同書に寄せた折口信夫の言葉につよく啓発される。続いて二十三年『小紺珠』、二十四年『山西省』、二十六年『晩夏』と矢継ぎ早に歌集を世に問い、はやくも戦後短歌を代表する歌人としてゆるぎない地位を築いた。東京歌話会、新歌人集団などにも加わり精力的な活動をみせる。二十七年の「多磨」解散の後は翌年三月いちはやく歌誌「コスモス」を創刊結成し、戦後短歌結社

の先鞭をきつた。斎藤茂吉、釈道空（折口信夫）が相次いで世を去つた年である。昭和三十二年『定本宮柊二全歌集』で毎日出版文化賞、第六歌集『多く夜の歌』で二十七年、読売文学賞を受ける。四十三歳で朝日歌壇選者となりその他にも多くの新聞、雑誌の選者となる。三十四年三月、父保治を喪う。三十五年四十八歳、軍隊生活をはさんで二十一年間勤めた富士製鉄をようやく依願退職し文筆一本の道に入るが、糖尿病に苦しむようになる。四十六年自選歌集『小現実』、四十七年『藤棚の下の小室』、五十年『獨石馬』、五十三年『忘瓦亭の歌』の各歌集刊行。糖尿病に合せて関節リウマチ、眼底出血、脳梗塞などを患い、たびたび入院を繰り返し、徐々に運動機能や発音に不自由を加えていった。柊二の後半生は病苦とのたたかいである。

五十五年、青春の歌稿ノートを『若きかなしみ』にまとめ、五十六年、『定本宮柊二短歌集成』出版、五十八年には日本芸術院会員となる。六十年七十三歳の冬、自宅で転倒し左大腿部骨折、いよいよ身体不
如意がすすむ。
六十一年は年頭
から入院、『純
黄』、『緑金の
森』、『白秋陶像』
の三歌集が夫人
宮英子の編集で

「多磨」信貴山大会のとき（昭和11年）



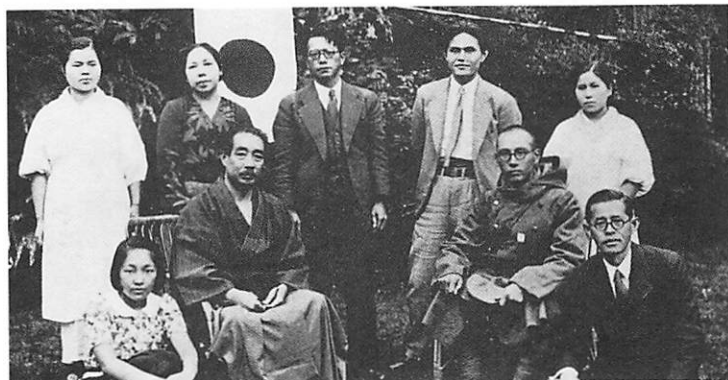
立て続けに刊行をみたのち、同年十二月十一日急性心不全で死去。七十四歳であった。二年後、生前の歌集に未収録作を集めて歌集『恒河沙』が編まれた。

第二章 歌と時代

宮柁二は北原白秋の晩年の一番弟子であり、白秋直系の歌人である。しかし宮柁二の歌には、少なくとも表面的には「言葉の魔術師」白秋の、あのきらびやかな華々しい言語美の世界は影をひそめる。白秋が軽く奔放であるとするれば、柁二はあくまで重く武骨の人であり、一步一步を飛ばずに地面を歩いてきた歌人であった。こういう師と弟子の作風の継承は、とくに短歌にあってはこくめずらしい。

それを資質の差といってしまうばかりに簡単である。時代の巨大な影が、なにより大きくそこに差していたとみるべきだろう。

大正元年生まれの宮柁二の世代は、戦争をともに当事者として引き受けなければならぬ宿命にあった。柁二はその宿命を文字通り双肩に受け、一兵士として過酷



前線出発前、白秋邸を訪問(昭和14年)

な中国戦線を苦しみに満ちて戦った。戦後は一族の長男としての別の宿命を引き受け、誠実な生活者として生きた。戦争と敗北、そして焼け跡から復興してゆくプロセスを一步一步たどらねばならない世代であり、白秋的詩人像は、おそらくたえずせり上がりつつも胸の奥に押しえ込まなければならなかった。「君は暗い」「君は何故孤独なのだ」「君の歌は瘤の樹をさするやうだ」と白秋は若き柁二に語ったが、その瘤の樹の瘤が暗く、しかし豊かな果実となって結実したのが戦後短歌を代表する宮柁二の営為である。

宮柁二の歌集は『群鷗』から『恒河沙』まで十三冊ある。代表的な数首を鑑賞しよう。

夜に聴けば矢振間川の川の音の魚野川に注ぐおとき
こゆ 『群鷗』

『群鷗』は二十三歳から二十七歳の初期作品を収めた青春の歌集である。ロマンチックな主題連作から『山西省』につながる骨太のリリズム歌篇まで作風は変化に富むが、やわらかな感受性がふるさとや近親者のうえにこころを開くときわけても印象的な作品となる。右の歌は「姉と瀬鳴り」の一連に見え、教師をしていた姉を夕方の職場に訪ねる場面になっている。魚野川は郷里堀之内町を流れ信濃川に入る大きな支流、また矢振間川(今日では破間川と書くようである)は南流して堀之内で魚野川と合流する。その事実を事実としてそっけなく述べただけだが、ふたつの固有名詞が喚起する一種蒼古な雰囲気(霧)が強い暗示力を持ち、古典的格調がある。ヤブルマガワ、ウオノノガワ、

の刻み込むような音感が夜の川面にはげしく響きわたるようで、
こういう語それ自身がもつ生き物としての感触へのアンテナが
白秋に学んだところであろう。

ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなく
くづをれて伏す
『山西省』

『山西省』のなかでもわけても知られた歌である。昭和十七年
の秋、場所は山西省北東部の山中であろう。「部隊は挺身隊。敵
は避けてひたすら進入を心がけよ、銃は絶対に射つなと命令に
あり。」の詞書を一連の頭に置く。冷たい雨の夜であったよう
である。



勤務先の富士製鉄(昭和35年)

銃弾や砲弾による死ではない。遭遇した敵をひきよせて、銃
剣で刺殺する。戦闘の
諸局面はたくさんの短
歌作品に詠まれている
がこういう場面は他に
例をみない。おそろし
い臨場感があるが、こ
の臨場感の中にはす
でにこの世の人間社会の
様相を越えたと思
わせる、むしろ超現実
的な純粹緊張がただよ
っている。沈黙と暗黒
のなかに展開される、

(宮 柵二)

戦争というよりは、人間存在そのものの極限の世界だ。殺す者
と殺される者が一体となり、寄り添いあい、抱きあい、そして
刃は一瞬に心臓をつらぬき、くずれる。

藤田嗣治の戦争絵画の名作「アツツ島玉砕」は兵士のしかば
ねの脇に一輪の青い花を描いたが、私は、この高名な歌にその
青い花をつよく連想する。

一本の蠟燃しつづ妻も吾も暗き泉を聴くごとくある
『小紺珠』

昭和二十一年の歌である。電力事情不安定な折りから、よく
停電した。蠟燭をともして人々は復旧を待った。貧しいが、ど
こか神聖な感覚がただよう歌であり、西欧の宗教画などに通ず
る雰囲気があるだろう。停電という日常のつまらない出来事を
清浄な祈りの場に転換している。ごくならかな文脈だが、蠟
燭の炎を出し、そこに視覚を集中させておいて、泉(の音)を
聴く、と聴覚に転換するところで、一挙にふかい闇が現前した。
ただの停電ではない、ここでも人間存在の暗黒とでもいふべき
深淵があらわれて、その前で息を呑む。一種の実存的不安がう
つくしい映像の中に揺れている。

鉄分の濃き井戸水を汲みあげて含み又浴びわがこころ
る孤り
『多く夜の歌』

宮柵二には戦後間もなく書かれた「孤独派宣言」という有名
なエッセイがある。「一切の変化に傷を負はないもの、変化のあ
とに悔恨や羞恥を残さないもの、一切の号令はかかる立場に立

つものからのみなされる。
さうしたもののだけが常に勇
ましい。私はもうさうした
ものからなされる号令を信
じない」。戦後短歌の出発と
してまことに正当であざや
かな言挙げであった。その
エッセイのタイトルが語る
ように、宮柊二の短歌には
孤独、ひとりといった語が
わけてもよく出てくる。

この歌は昭和二十八年作、
歌誌「コスモス」を旗揚げしてまもない頃の歌。鉄分の濃い井
戸水をあらあらしく飲み、また浴びる。激しく、あらあらしい
生の様相を屈折して絞り出すように歌っている。柊二の孤独は
けっして自閉的なそれではなく、甘やかなそれでない。四句から
結句への停滞し淀むよどようなリズムが印象的だ。

かくままでに心の奥処おくかまがなしく嫉妬しとをするを老いそ めて知る

「獨石馬」

昭和四十四年、五十七歳の歌。戦争で身を削った宮柊二に身体
の衰えは早く来て、四十代からさまざまな身の不調と付き合わ
なければならなかった。「老いそめて」には誇張はないだろう。

憤怒おんぬはひとときの激情だが、嫉妬しとという感情は延々と持続す
る。妄想が妄想を呼び、また嫉妬するみずからを蔑むあやむもうひと



毎日出版文化賞の祝賀会(昭和32年)

りのじぶんが顔を出し、
御ごしがたく実によっか
いな感情である。こう
いう始末におえない感
情は若いときに特有の
ものと思っていたが、
老齢になっても嫉妬す
る。いや、よりいつそ
う生々しく嫉妬する。
「老いそめて」はじめ
て知った嫉妬の「まが
なしさ」。こういう信仰
告白のような激しさ、
悲しさがいかにも宮柊
二の歌である。枯淡の
境地などというものに縁がない。幻想が身をさいなみ続ける。

庭に咲く白さるすべり紅蜀葵こうしきぎを今日ささげむか栄あ る君に

「白秋陶像」

『白秋陶像』は生前最後の歌集である。ゆったりとした平穏な
歌境に晩年の慈味ふかく、印象に残るものもまた少なくない。

右の歌はロサンゼルス・オリンピックで金メダルを獲得した柔
道の山下泰裕選手やまのたかひろを称えた一連で、昭和五十九年八月二十五日
の毎日新聞に発表された。わが庭の白いさるすべりの花と紅蜀
葵の花を栄光あるあなたに捧げようと、ただそれだけの文字通

新居での「コスモス」編集室、中央が柊二(昭和54年)



りハレの歌であるが、儀礼的な表現の中に、まごころがこもり、来たるべき次世代への信頼が率直に述べられ、何気ない一首だが歌人最晩年作にふさわしい。白と紅の対比には無意識のうち、日の丸が重ねられている。テレビ画面の中で日の丸を仰いで涙を流す青年に、病床の老歌人は万感の思いを重ねている。

第三章

短歌史におけるポジション

宮柁二は旧制中学のみであとは学校とは離れた。指導的歌手の中でこの点、やや例外であろう。一兵士として中国戦線に赴



故郷、堀之内小学校の歌碑の前で夫人と(昭和52年)

き、最前線に戦闘に参加し、極限の惨劇をつぶさに体験した。陸軍伍長にまで昇進しているから勤勉で有能な兵士だったのである。戦後は家族を引き受け、父親としてまた長男として責任をつよく自覚し、

(宮 柁二)

生活者として苦闘した。四十八歳のときまで市井の一会社員であった。大正から昭和の激動を生きた日本人として、ごくありふれた、どこにでもいる生活人の経歴がそこに重なる。まぎれもない「庶民」のすがたである。

その一方で孤独な自己凝視の人であり、内省ときびしい自己批評をたえずみずからに課した。「庶民」ではありえない生のありようである。この二重性の中に「戦後」のもっとも良心的な短歌的投影があった。名実ともに戦後短歌の名を身をもって担う歌人である。

短歌史のポジションとしては宮柁二は、世代的にも、実作と論の影響度という点でも、また有力な戦後結社の創設という点でも、近藤芳美、佐藤佐太郎と比較される。近藤芳美は誠実なインテリゲンチヤとして、短歌に開かれた社会性を求めた。佐太郎は短歌には「事件的具体」は要らぬといい、写生の様式美を厳格に追求した。三者の中で宮柁二はもっとも混沌としているようにみえる。あらあらしい「生」そのものがいつもむきだしになっており、その傷は、歴史の傷そのものに似ている。

孤独の人、内省の人でありながら結社「コスモス」は大きく成長し、幾多の人材を世に送り、なお送りつつある。戦後の短歌結社のありかたという点でも屈指の手腕を示した実家であるが、こういう多面性もまた宮柁二の「混沌」に属しよう。

(こいけ・ひかる「短歌人」編集人)

※次号は佐藤佐太郎(花山多佳子筆)です。